

シツクスベンス

／
ン・ザ

リツチャー

タクシーのラジオからはバカに陽気な口の声が聞こえる。窓の外は雨。歩道の街灯に明かりが灯り始めて雨のせいで道は混んでいた。ついさっきまで俺には彼女がいた。つまり、ついさっき別れてきたところだ。

別れた理由は「すれちがい」

俺と彼女の人生はたった五文字で表せるようなことで分岐点を迎えた。分岐点などと言うとそれらしく聞こえるが、要は仕事でろくに会えなりそれが当たり前になった。たまに会っても食事をして、彼女が録りだめしていた深夜アニメなどを何となく見るだけ。彼女は鼻水を垂らして泣きながら見ていたが俺は主人公の名前も思い出せない。そう言えば一度、予約録画を頼まれていたのに操作手法がいまいち分からず、失敗して彼女の機嫌を損ねたこともあった。

いつか買ったお揃いのマグカップに至っては使ったのは最初の数週間だけで、電子レンジで使えないという理由で戸棚の奥に追いやられた。

彼女の家を出る時、意外なこととちょっとした言い合いになった。

「あのマグカップは持って帰ってよ」「いいよ、いらぬ」

そう俺が言うと彼女は別れ話の時よりもよっぽど悲しそうな顔をした。確かに思い出の品ではあったけれど、全く使っていないものを唯一の土産に持たされるのは癪だった。

「いらぬって」「いいから持って帰って！」

変な気分だった。もうずっと忘れてたけれど、この子に一目惚れして三年前に交際を申し出たのは

俺の方だった。怒った彼女の顔を見て久しぶりに可愛いと思ってしまったのだ。もちろん、だからどうということではない。結局、その尖らせた唇に負けて俺はマグカップを持って今タクシーに乗っている。

頭の悪そうな「」が交通情報を読み上げる。どうやら渋滞はまだ続くらしい。俺がため息をつくとき、気を使ってか運転手はラジオのボリュームを上げた。

「はい、たくさんのメールが来てますう！早速読んでいきましょう！ラジオネーム・ホットミルクさんからメール！『こんばんは。突然ですが、ワタシは最近、彼氏と別れました！』」

なんとという偶然なのだろう：世の中似たようなやつらがいるものだ：。「」は続けた。

「『出会った頃はあんなに好きでたまらなかったのに、どうして人の気持ちはこんなに変わってしまったのでしょうか？大切な存在にどうして気付かなくなってしまったのでしょうか？今、彼はどんな気持ちなのでしょう？もし私と同じ気持ちなら：』」

そこまで読み上げて急に、パリっとしたスーツを着ていそうな女性アナウンサーの声に切り替わった。どうやらこの先で事故があったらしい。何秒かして運転手がブレーキを踏んだ。どうやら事故はすぐ先であったらしい。

「すみませんね」無愛想な運転手は首だけを軽く捻って言った。ブレーキのせいで座席から落ちたマグカップが足元でひび割れていた。マグカップの裏底には油性マジックで「命の石」と書いてあった。見覚えのある癖字だ。

付き合い始めた頃、俺達は二人揃ってロール・プレイング・ゲームに熱を上げていた。「命の石」は仲間が死んでしまう時に代わりに砕け散って、一度だけ命を救ってくれるアイテムだった。

「もし別れそうになったら、このマグカップが私たちの身代わりね」そう言ってマグカップの裏底に何か書いていたのを今思い出した。彼女は今、何を考えているのだろうか。泣いてるだろうか。それとも何もなかったように、録りだめしたアニメを見てるだろうか。当たり前のように注がれてた彼女の優しさは、ひび割れた俺の心から漏れていたのかもしれない。街灯の明かりがタクシーの窓から入り込んで来る。オレンジ色の光が倒れたマグカップの底を照らし出し忘れかけていた記憶を呼び覚ます。

付き合い合って一年程過ぎた頃、深夜に俺が熱を出したことがあった。薬局はどこも閉まっていて薬が買えなかった。翌日に大事なプレゼンを控えていた俺は彼女に電話をして薬を持ってきてほしいと頼んだ。

「すぐに行くから！」そう言った彼女が俺の家に着いたのは結局、二時間以上あとだった。あとから彼女の友達に聞いたのだが、そのとき彼女の手元にも風邪薬は無く、深夜にも関わらず手当たり

次第友達に電話して風邪薬を持っているか聞いて回ったそうだ。やっと見つかった薬を持ってる友達の家までタクシーで行き、薬を持ってそのまま俺の家に来たらしい。電話で起こされた友達には迷惑な事件だったと思うが、俺にとっては彼女をもっと大切にしたいくなる事件だった。

笑顔も寝顔も不満顔も泣き顔も、一番側で見えてきた。一番側で見せてきた。どうしてこんなことを思い出すのだろう。事故の緊急速報が終わると、ロは詫びを入れつつメールを最初から読み始めた。ロはさっきとは打って変わって低いトーンで言った。

「大切なモノって…失ってから気付くんだよね。もし、このメールの子がやり直したいと本気で思ってるなら、彼にその気持ちを真っ直ぐぶつけてみるべきじゃないかな。彼も同じことを思ってるかもしれないんだから。本当に大切に思うなら怖がっちゃダメだよ」ロはそのまま曲紹介に移った。流れてきた曲は Sixpence None the Richer の『Kiss Me』だった。ああ、この歌は…。そう思っていたところで、ずっと黙っていた運転手が前を向いたままボソツと言った。

「お客さん、このロ知ってるかい？」「いえ、有名なんですか？」少しの間があって運転手は続けた。

「こいつ、実は同級生でね。以前、病気で声が出なくなってきた。こうやって喋れるまでに三年かかったんだよ。あまり知られてないけどね、苦労人なんだよ…」

『大切なものは失ってから気付く』『その気持ちを真っ直ぐぶつけてみるべきじゃないか』ロの言葉が胸の奥を強く突いた。

「そもそも俺らが出会ったのは…」運転手の話を遮るように後続車からのクラクションが鳴った。

「運転手さん、ありがとう」もっと喋りたそうな運転手を尻目に運賃を払った俺はタクシーを降りて、傘が咲き乱れる道を走っていた。

女

とうとうこの日が来てしまった。

三年間続いた彼との関係が今日で終わってしまった。この部屋を探しに不動産屋まで一緒に付き添ってくれたのも彼だった。彼が出ていった玄関を眺めながら、もう二度と取り戻せない彼の背中を思ってしまった。

別れ話をするタイミングはここ数カ月は何回かあった。それは私からでも彼からでも。それでも今日まで先延ばしになっていたのは私の仕事が一段落するまで彼が待っていてくれたのだと思う。そういう優しさのある人だった。

別れ話の最中に彼の携帯電話が鳴った。無機質な電子音が冷たい部屋に響いた。

「出てもいいよ」彼は電話に出なかった。付き合い始めた頃、ちょうど同じように彼の携帯電話が鳴ったことがあった。仕事関係の電話だったらしく、私はかなり待たされ不機嫌になった。それ以来、彼は私といるときに電話に出なくなった。

こんな日は一人で居たくない。仲の良い友人に連絡を取るが誰も捕まらない。外は雨が降り始め沈んだ気分を一層暗くする。

本当にこれで良かったのだろうか。彼は今、帰りのタクシーの中だろうか。何を思っているのだろうか。気を紛らわせたくてテレビを点けると、画面の右上に「ハードディスクの容量が残りわずかです」という注意を促すメッセージが出た。録りだめした番組一覧を見て古いものから消していく。ふとりモコンを操作する手が止まった。

『君と僕のさいごに』

内容が思い出せない。何となく私は再生ボタンを押した。

そのアニメは余命数ヶ月の老婦人が病院のベッドで、老紳士風の夫に思い出話をするシーンから始まった。

「私ね、実は結構モテたのよ。あなたと付き合ってからいろいろな男の人に言い寄られたわ」
目を細め妻は窓の方を眺める。

「そうだったのか。ちっともそんな素振りを見せなかったね」
病室に差し込む夕日を邪魔しないようなゆったりとした口ぶりで夫が応えた。

「あなたはそういうことなかったの？」

「分かっているだろう。僕にはそういったことは無かったよ」

「ええ、分かっていたわ」

穏やかな沈黙が流れた後、妻が大きく深呼吸した。

「一度、あなたと喧嘩したことがあったわね。まだ結婚する前に」

「あぁ、あったね」

「あの時ね、本気でこの人とは終わりかもしれないって思ったのよ」

「それは知らなかった。もしそうになってたらお互いに全然違う人生だったろうね」

ベッドの横に置かれた写真立てには子供たちと写った家族写真がある。

「でも、そうならなくて良かったわ。あの時別れていたら、今あなたは隣にいてくれないんだもの。それが今の私には一番辛いことだと思う」夫は優しく微笑む。

「そう言ってもらえるのが、今の僕には一番の喜び」

そこで突然、映像が途切れた。予約録画を失敗して謝っていた彼を思い出した。何だか少し可笑しくて、それが私を切なくさせた。

老婦人の言葉が何度も胸の芯を問いただしてくる。

「あの時別れていたら、今あなたは隣にいてくれないんだもの。それが今の私には一番辛いことだと思う」今、私が一番側にいて欲しい人は誰だろう。いろいろな場面で見えてきた彼の優しい笑顔が一遍に去来し、私の心の一番奥を揺さぶる。

「やだ：やだやだ：絶対やだ!!」 気が付くとそう口走っていた。彼を失いたくない。私は携帯電話を手に取り彼に電話をかけた。彼は出てくれるだろうか。少しの間を置いて、耳元で鳴る呼び出し音。そこで違う音が聞こえてくることに気付いた。私は電話を耳から離し、その音のする方へ行ってみる。さっき彼が座っていたところだ。そこには彼の携帯電話があった。ポケットから落ちたのかもしれない。彼の電話から聞こえるメロディーに私はもう泣きじゃくっていた。

彼が私に付き合っしてほしいと言ってくれた日、私たちは駅ビルのレストランで食事をしていて。彼が緊張しながら想いを伝えてくれ、私が喜んでうなづいた時、店内に流れていた曲だ。

「この歌、好きなんだよなあ」緊張から解き放たれた彼は私の目を見てそう言った。

「何ていう歌？」『Kiss me』「そう言って彼は私にキスをしてくれた。すごく嬉しかったの覚え
ている。私からの着信音だけが特別だったなどは、一度だって口に出さなかった彼がもうどうし
ようもなく愛おしかった。会いたい。いますぐに会いたい。彼の携帯電話を持って、走ってでも会
いに行こうと思ったその時、部屋のインターホンが鳴った。

彼女に会って何を話そう。合鍵を返し忘れたのを口実にしようか……そんなくだらない小さな考えは右手に握った「命の石」がかき消してくれた。

辺りはすっかり暗くなっていた。玄関の前に立ち、肩で息をしながらインターホンを押す。

何とも言えない間。

早くなった心臓の鼓動だけが耳元で聞こえるようだった。

「はい……」彼女の声がインターホン越しに聞こえた。

「……俺だけ……」

インターホンが切れ、聞き慣れた足音が向かってくる。ドアが開くと彼女がひょっこり顔を出した。まぶたが腫れてるのはアニメを見たせいだと言った。無理に明るく努めようとした彼女の顔が俺の差し出した右手を見て、くしゃくしゃに崩れていった。

部屋に入って正直に気持ち伝えた。ここに来るまでのことも話した。ロのここと、メールのこと、マグカップのこと、運転手のこと……その間、彼女は何度も笑い、何度も泣いた。彼女は台所にいくと、戸棚の奥からもうひとつのマグカップを出した。

「何か飲むか」彼女が淹れてくれたのはホットミルクだった。

「レンジでチンするより、ゆっくり温めたほうがおいしいね」

少し腫れたまぶたが愛おしかった。

しばらくして俺は、彼女の部屋のラジオをつけた。さっきの「」は相変わらずのハイテンションだった。

「この人だよ、さっき話した人。病気で声が出なくなったっていう」俺が言うと、彼女から返ってきた答えは予想もしないものだった。

「……この人：声優さんでデビューしてからずっと活躍してるよ？」「えっ？…いや…そんなはずは…」混乱している俺の耳に「」の言葉が入ってくる。

「続いてのメールでえー！す！ラジオネーム・都市伝説大好きさん！『こんばんは！いつも楽しみに聞いてます！最近、友達から聞いたんですが、「嘘つきタクシー」って御存知ですか？乗客が損も得もしない嘘をつく、変わったタクシー運転手がいるそうです……」

おしまい。